てしまったのだ。その後、私は学内で一躍有名人(?)になってしまった。

留学中、よくしたのは旅行である。おおぜいで家畜同伴可の三等車に乗り込み、マレー半島を縦断してバンコク、チェンマイまで行ったり、マレーシア・タイ国境地帯の文化的特徴を調べるグループに入らせてもらったりもした。ジャングルに踏み込んでよくマラリアにかからなかったものだ。課外活動として選んだ演劇はとても楽しく、二〇〇五年ノーベル文学賞を受賞したハロルド・ピンターの小劇を何度か演じた。寮では、友達と寝食忘れ議論するということもあり、異なる価値観を持つ相手を受け入れる寛容な態度(オープンマインデッドネス)の大切さを学んだ。

UWCの卒業旅行として、友達とマレーシアへ(中央が筆者)

西洋対アジアという枠組みの超越について考える

当時文化受容の問題について考えるところがあった。第一に「国際」という名目で、特に教育方針の面でイギリス中心主義が幅をきかせていた。普遍性を掲げているが、国際理解のあり方もひょっとしたら英国の観点から見たもので、他の形での国際理解も存在するのではないか。第二に文化相対主義の立場から、宗教や民族性を公の場でも主張していいとする寛容さが浸透している一方、寮で見られた現象なのだが、華僑のアジア系グループと、欧米系グループが分かれて交わらない。差異を尊重するばかりに、異文化間コミュニケーションが阻止されているのではないか。第三に、どちらのグループに属したらいいか迷う日本人の私は一体何なのか、である。華僑の友達から、太平洋戦争中一家が日本軍に殺されたという話を聞き、私を含めた日本人に対して警戒心を緩められない様子を感じ取った。一方、私はマレー半島における太平洋戦争についてあまりにも無知であった。

フランスを拠点とする

折角楽しくなってきた海外での学生生活を延長すべく、英国の大学に願書を提出し合格通知をもらったが、諸般の事情で日本の大学に進むことにした。学生生活に物足りなさを感じていた矢先、フランス人の、現在の夫と出会い、学生結婚して周囲を驚かせた。英米圏の大学院に進学を希望していたのだが、見事に狂って、様子の全くわからないフランス行きとなった。同じ西洋とは言っても、英米文化圏とは学問の伝統の面だけでなく、政治、経済、社会システムが甚だしく異なる。再度勉強させてもらって、気がつけば幼稚園から今までずっと「学校」に居残る羽目になり、大学で教鞭をとる身になっていた。

現在私は、硬直化した自国のシステムに対して愛想をつかしているフランスの大学生に、ありのままの「日本」を教えるように心がけている。日本関連の講義は、それだけでも欧州中心主義の対抗策として機能しているが、それ以上にさまざまな局面での日本発の解決策をそこに提示できる。今冬の初期雇用契約(CPE)反対運動では、仏の深刻な雇用問題が世界にあらわになった。門外漢ではあるが、国、経営者、学生、労働者等各アクターが日本や他国の例を共同研究して、衝突を避け、よりプラグマティックな解決を探る思考回路を身につけてくれたらと密かに願う。

もう片方の私の仕事である研究においては、「外国人」認識の問題に長く取り組んできた。UWC体験とどこかでつながっているのかもしれない。現在は、異文化間の社会現象の分析に関心を持ち続けながら、明治初期の近代揺籃期に注目し、フランス法体系の採用を試みた初代司法卿江藤新平の思想を通して、「民」の思想の変遷を追ってみようと思っている。

この場を借りて、素晴らしい体験を可能にさせてくれた日本経団連の皆様に心からお礼申し上げたい。

UWC経験あっての現在
——日本とフランスを結ぶ

フランス リール第三大学ロマンス・スラヴ・東洋学部助教授　パリ 社会科学高等研究院（EHESS）日本研究センター研究員
ベルランゲ河野紀子
BERLINGUEZ こうののりこ

一九八三～八五年、経団連UWC日本協会の奨学金によりUWC東南アジアカレッジ（シンガポール校）に留学。九〇年、京都大学法学部卒業。九一年、リール第二大学法学部政治学科政治学DEA（博士準備課程）取得。九三年、パリ社会科学高等研究院歴史学DEA取得。九九年、社会科学高等研究院にて博士号（歴史社会学）取得。その後リール第三大学に勤務、現在に至る。四歳と生後六カ月の二児の母。

●㈳ユナイテッド・ワールド・カレッジ（UWC）日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに四〇七名の卒業生を輩出している。

フランス北部リールという町

パリから北へ仏新幹線TGVで一時間のところに、リールという都市がある。別名「ヨーロッパの十字路」と呼ばれるこの町はベルギー、オランダ、イギリスからの観光客で年中ごった返している。近辺にはトヨタをはじめとする日系企業が進出し、町中に日本人の姿を見かけることも少なくない。

この町に住みはじめて、かれこれ一六年経過した。現在リール第三大学で教育、研究に従事している。担当している講義は日本学科の日本史（特に近現代）、現代社会である。空前の、日本の漫画・ゲームブームや、既成システムに対抗するシステムへの期待感を背景に、「日本学」を専攻する学生の数は年々増えており、学内でも極めて人気がある。学生たちは日本語・日本文化を専門的に学習し、日本研究スペシャリストになるよう養成される。一方、研究に関して言えば、私は歴史社会学的手法で日本社会の「近代」を探るべく、異文化受容を思想史の面から扱っていくのに興味を持ってきた。

私の原点となったUWC体験

こういう私の職業選択、研究内容を凝視すると、そこには私のUWC体験が原点としてあるということに気がつく。二〇年以上経った今であるが、あの貴重な二年間がなければ、現在の私はないだろう。

毎日、毎日が充実しているとともに試練でもあった。もともと社会科学が好きだった私は、経済と歴史を専攻したのだが、特に歴史には苦労した。博士号を持つというその優秀な先生はほとんど板書をせず、口頭で講義するのだったが、何しろ聞き取れない。その上、膨大な量の資料を読ませた上で、賛否を明確にしなければならないような論文を頻繁に書かせる。中学からエスカレーター式に上がってきた生徒たちは、授業や教師陣に関する楽勝（?）情報を握っている。明らかに不利な立場にいたので、ここは開き直ることにした。成績は歴史が一番悪かったのだが、日本の高校にはない、論文で議論させる歴史学の処方に強く惹かれていった。と同時に、アジアを扱う場合の、イギリス中心主義の歴史観にしばしば閉口したものだった。

経済学の授業は、少人数のグループのディスカッション形式で進行していくというもので、内容、形式ともに充実したものであった。エクステンデッドエッセイという本格的な論文では、鉄鋼需要の減少に対する一企業の対応を分析した。経済学は学問としては大変興味深かったのだが、人間行動の定義が極めてドライなのに納得がいかないと、友達と議論したのを覚えている。

とんだハプニングを起こしたこともある。遅れを取り戻そうと睡眠を削った結果、日本で気軽にしてしまうように、授業中居眠りし